

学習会(子ども会)だより 8月号 合併編
MY SKY 第8号
マイ スカイ
1995年8月21日 月曜日発行(毎月第2・第4土曜後の火曜日定期発行)

発行者
板野中学校
学習会
編集・文責:吉成正士

毎日暑いですね。暑さにへばっていませんか?へばる原因はいろいろあります。^{きゅうげき}急激な気温の変化もそのひとつですね。つまり、冷たい飲み物の取りすぎやクーラーのあたりすぎは、体調を崩^{くず}すもとになります。気をつけてくださいね。

ところで、夏休みも残すところ後わずかとなりました。もうそろそろ毎日の生活をもとに戻し、2学期に備^{そな}えておきましょう。(夏休みの課題もお忘れなく!)

みんなの元気な姿が見られることを楽しみにしています!



◎^{せんせい}なんしに先生になったんな!(7月21日:徳島県部落解放高校生奨学生集会・郷土文化会館にて)

みなさんが夏休みに入った日、徳島市内にある郷土文化会館で県の解放奨学生集会(これは「県奨」と呼ぶす)が行われました。

「部落差別を解消していくためには教育が必要だ」という考えのもと、部落解放を^{みずか}自ら実践していく人間を育成することを目標に、解放奨学金という制度が設けられました。これも解放運動の^{せい か}成果の一つです。もしこの解放奨学金がなければ、今のように差別解消は^{じつげん}実現してなかったと思います。それを考えると、たいへん^{かつ きてき}画期的な制度だということが分かりますね。

ところで、この県奨に板中からも何名か参加していました。しかし本来は高校生の会なので、発言もできるだけひかえるという形での参加になりました。

それでも、高校生の仲間のパワーは十分に感じる事ができたと思います。同じ徳島県内にもこれだけ多くの仲間がいたのかと^{おどろ}驚いたのではないのでしょうか。そんな中、私はこんなことを考えていました。

『こういう会の「中学生版」があれば、高校での盛り上がりもさらに大きなものになる!』

実際、この集会に来て、初めて自分の中に意識が芽^めばえたという高校生が毎年たくさんいます。

昨年の県奨の時「初めて人前^{ひとまえ}で発表します……」とたどたどしく発表していた彼が今年も来ていました。彼もこの県奨で芽^めばえた一人でした。その彼が、この1年間自分にでき

それからは、部落問題についての話に終始^{しゅうし}しました。

しばらくして、彼は私の話を遮^{さえぎ}るように間^まをおき、こう言いました。

「……先生……実はオレそうなんですよ」

ハッとしました。と同時に、私は彼との今までの距離が一瞬^{いっしゅん}のうちに縮まったような気がしました。妙な話^{みょう}ですが、すごく嬉^{うれ}しかったのです。それからなお一層話は盛り上がっていきました。挙げ句^{あき}の果てには

彼：「先生、今から家に行ってもいいですか？」

私：「ほらいいわ！」

ジュースやビールを手にして彼がうちを訪ねてきたのは、11時半くらいでした。朝の3時くらいまで話したでしょうか。

明るる日に県総体の1回戦がひかえていましたが、眠気^{ねむけ}よりもむしろ、充実感^{じゅうじつかん}と感動^{かんとく}で胸をいっぱいにした朝を迎えることができました。

みなさん！部落問題について誰とでも話ができるということは本当にいいものですよ。いつもいつもうまく話が進んでいくとは限りません。「何でわからんのな！」と思うこともあると思います。けど、たった1個のダイヤモンド^{げんせき}の原石を見つけられた喜びがあれば、何度でもトライできるように思います。相手に、限りなく近づいていけることが、喜びの一つなのですから！



◇ ◇ ◇ 今後の日程 ◇ ◇ ◇

残り少なくなった夏休み……名残惜しい……けど、終わればそこには2学期……ちょっとだけ待ち遠しい……かな？！

特に2学期は行事が目白押し！目が回らないように、しっかりしましょうね！そして、たくさんの行事を無駄にしないように、せっかくですから学級づくりに役立ててください！

★8月22日(火)・23日(水) 3年生・夏休みの学習会(郡頭教育集会所 1:30~4:00)

☆9月16日(土)・17(日) 板中祭(体育祭・文化祭)

★9月28日(木) 1年B組1年全体学習

☆9月30日(土)~10月3日(火) 2年生修学旅行

部落の起こりとその歴史 第5話「華やかな時代^{はなやかなじだい}のかけで」

前回、1600年代後半から1700年代にかけて形づくられていった非人身分のことにつ

いてお話ししましたが、今回もちょうどその頃のことをお話したいと思います。

1600年代後半から1700年代前半にかけては、元禄^{げんろく}、享保^{きやうほう}期と呼ばれ、それまでの米^{こめ}経済^{けいぎ}から貨幣^{かへい}経済^{けいぎ}へと変わっていった頃でした。また都市は繁栄^{はんえい}し、元禄文化^{げんろくぶんか}が真^まっ盛^{さか}りの頃でした。

村のよろず屋^やに出かけると、農具^{にちようひん}や日用品は手に入りましたし、若者^{わかもの}目^め当^あての髪^{びん}つけ^{あおら}油^{あぶら}やおしゃれな品も出まわっていました。少し前まではとても考えられないような変化です。

つまり、小さな村にまで貨幣経済が入り込んできたのです。ですから、農民は「銭^{ぜに}になる農業」を考えざるを得^えませんでした。

そんな時代背景^{じ だいはいけい}の中で、徳島藩^{あいさく}では藍作^{きやうそく}が急速^{はってん}に発展していきます。1700年代の中頃^{あいきくいつしよく}には、吉野川流域^{あいきくいつしよく}が藍作一色^{いっしよく}にぬりつぶされたほどでした。

ところが、藍作^{さか}が盛^{さか}んになればなるほど藍作農民^{きやうそく}の生活^{くわく}は逆^{さか}に苦^{くる}しくなっていました。「藍師^{あいし}」と呼ばれる、藍作農民のまとめ役に支配^{しはい}されるようになっていったからです。藍作をするために必要なお金を、農民に高い利息^{りそく}で貸^かしていたのです。中には借^{しゃ}金^{つきん}が支払^{しはら}えずに、大切な土地を藍師^{あいし}に手放^{てばな}し、小作人^{こさくじん}や日雇^{ひやと}いになった者もいます。

一方、大切な土地を次々と手にしていった藍師^{じぬし}は、地主^{じぬし}という立場に変わっていきましました。つまり、村の中に藍師を中心とする一部の裕福^{ゆうふく}な農民と、その反対に多くの貧しい農民ができていったのです。

しかし、藩にとってそれらの傾向^{けいこう}は、好ましくないことでした。年貢^{ねんぐ}としての米が集まらない上に、有力藍師^{りえき}が多くの利益^{りえき}を独り占^{ひと}めにしていたからです。

それらをさせないために、藩^{おこな}が行^{おこな}ったことについて、これから少しだけお話したいと思います。

享保^{きやうほう}18年(1733年)、藩は藍から生まれる利益^{きやうしゆう}を吸^{あひ}収^{しゆう}するために、藍方奉行所^{あいかたおぎやうしよ}という役所^{やくしよ}を新設^{しんせつ}しました。また宝暦^{ほうれき}4年(1754年)には「玉師株^{たまし かぶ}」という言葉で藩が藍師^{あいさく}を指定^{ししてい}し、多額^{たがく}の税金^{ぜいきん}を取り立てようとしていました。これらのしわ寄せは、当然農民^{ふし}へと移^{うつ}されることになります。

宝暦6年(1756年)、藍作地帯^{ふそ}の農民に、1枚の紙が密かに回^{ひそ}されました。藍作農民に対して一揆^いに立ち上がるよう求めた文です。農民たちは計画通り各地で立ち上がり「藍作税^{あいさくぜい}」と「玉師株^{たまし かぶ}」の廃止^{はいし}を訴^{うった}える氣勢^{きせい}をあげました。

しかし藩も一揆を押さえるために必死でした。そして京右衛門をはじめ、一揆の指導者が逮捕されたのは、それからしばらくしてからのことでした。藍作農民が鮎喰川に集会し、城下に押し出そうという計画は決行直前に崩れてしまったのです。

一方、京右衛門たちは牢につながれ、毎日のように拷問に責められていました。そして結果的に、藩の決まりを破り世間を騒がせた責任により、京右衛門を含めた5名が死罪を言い渡されたのです。

そんなとき刑の執行に命じられたのが、部落の人々でした。部落の人々にとっても藍作農民の苦しさは十分に理解できていました。農民も部落の人々も、封建社会の中で苦しむ同じ仲間だからです。

処刑当日の様子について、こういう記録が残っています。

『この日晴天、正午の刻夜とも昼とも分かちがたく、朧月夜のごとくなり。

この時藍圖百姓数万人寄り来たり、愁嘆す』

藍作農民にとって京右衛門たちは自分の命をかけて闘ってくれた大恩人でした。多くの人々が嘆き悲しんで、刑場に集まってきました。その中で、部落の人々は刑の執行にあたらされたのです。5人の遺骸は、しばらく見せしめとしてさらされました。その警護も、部落の人々でした。

もし、ひどい仕打ちに対する憎しみが部落の人たちへとすり替えられたとしたらどうでしょうか。この出来事で、部落の人々に対するミゾは決定的に深まり、風当たりは一段と強まったに違いありません。

確かに多くの犠牲を払い、藍作税と玉師株は廃止になりました。しかし、民衆をバラバラにして支配するという藩のねらいは、紛れもなく貫かれ、この後の政治に都合よく利用されていったのです。

華やかそうに見える文化も、それは表面だけのことで、その裏には悲しい現実があったのです。

「やさしい阿波の部落史」より改編